

## 研究主題 「伝え合う力をはぐくむ学習指導の工夫 －聞き手の『感じる力』『想像する力』の育成を通して－」

東京都教職員研修センター研修部教育開発課  
豊島区立池袋第二小学校 教諭 三田 典子

### I 研究のねらい

新小学校学習指導要領国語では「伝え合う力を高める」ことが目標の一つに挙げられ、同解説国語編（平成20年8月）で「伝え合う力」は、表現する力と理解する力の二つの力を高めること、そしてそれらの力は、人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重してはぐくむこととされている。また、言語力育成協力者会議（平成19年8月）では、「伝え合う力を育成するため、相手の立場を考慮しながら双方向性のある言語活動」の指導の充実が述べられている。「伝え合う力」をはぐくむためには、話し手側の一方向になりがちであった学習活動を見直し、双方向性をもって互いの思いや考えを共有したり、新たな思いや考えを生み出したりできるような学習活動が必要であると考えた。そのためには、「感じる力」「想像する力」「考える力」が必要であり、特に、互いの立場や、思いや考えを尊重して相手を意識して伝え合うためには「感じる力」「想像する力」を育成することが重要である。そこで本研究では、「話すこと・聞くこと」における聞き手の「感じる力」「想像する力」の育成を通して伝え合う力を高める指導方法を開発することとした。

### II 研究の内容と方法

研究仮説	聞き手の「感じる力」「想像する力」を高める学習指導を行うことで、話し手の言外の思いや真意を受け止め、話し手、聞き手の双方の思いや考えを深めたり広げたりすることができ、「伝え合う力」をはぐくむことができるであろう。
基礎研究	(1) 「伝え合う力」の定義と意義について (2) 「話すこと・聞くこと」における聞き手の能力の育成について (3) 「感じる力」「想像する力」の重要性について (4) 「伝え合う力」をはぐくむ指導方法と評価の検討について
調査研究	都内公立小学校第4学年（38名）、第5学年（23名）の観察対象児童の話合いの発話分析を行い、学習指導における児童の変容と成果について考察した。（報告書では第5学年のみ報告する。）
開発研究	(1) 「話すこと・聞くこと」における「伝え合う力」の能力表の作成 (2) 「話すこと・聞くこと」における聞き手の「感じる力」「想像する力」の指導方法の開発 (3) 「話すこと・聞くこと」における「伝え合う力」をはぐくむ単元の開発

### III 研究の結果と考察

#### 1 基礎研究

##### (1) 伝え合う力の明確化

文献や先行研究、小学校学習指導要領解説国語編（平成20年8月）を基に、伝え合う力を次のように定義した。

「相手の思いや考えを大切にしながら聞き、自分の思いや考えを話し、互いに深め広げ合う力」

##### (2) 聞き手の能力の育成

互いの思いや考えを深め広げ合うためには、聞き手の能力の育成の重要性が基礎研究で明らかとなった。聞き手は単に話を聞くだけではなく、相手の話を理解し「自分の思いや考えをもつ力」や、話し手の言外の思いや真意を受け止め、分からなかったことは聞き返すといった「受けてつなげる力」を伸ばすことが重要である。

### (3) 「感じる力」「想像する力」の重要性

平成16年の文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力」では、国語力の中核を「考える力・感じる力・想像する力・表す力」として、以下のように示している。

【考える力】分析力、論理構築力などを含む論理的思考力

【感じる力】相手の気持ちや文学作品の内容・表現などを感じ取ったり、感動したりできる情緒力

【想像する力】事柄などを推し量り、頭の中でそのイメージを自由に思い描くことのできる力

【表す力】考え、感じ、想像したことを表すために必要な表現力

「四つの力が、具体的な言語活動として発現したものが『聞く・話す・読む・書く』という行為」と示されていることから、「話すこと、聞くこと」の活動において、「考える力」「感じる力」「想像する力」といった内的な活動が重要であることが言える。これらの「考える力」「感じる力」「想像する力」は明確に分けられるものではないが、先行研究でも明らかになったように、「話すこと、聞くこと」の活動において、「考える力（論理的思考力）」が重視される傾向が見られる。そこで本研究では、「感じる力」「想像する力」に焦点を当てる必要があると考えた。

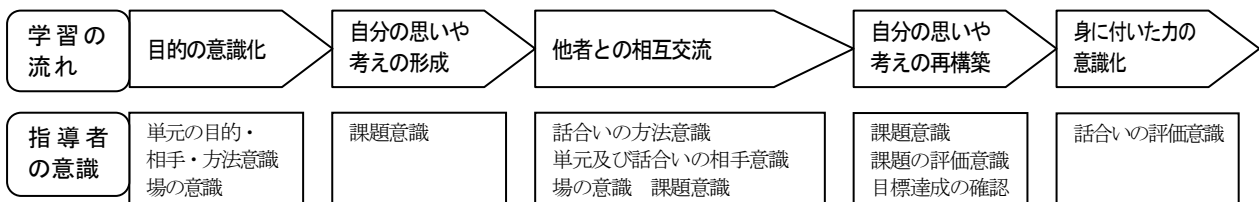
## 2 調査研究

平成21年7月に第5学年を対象に発話分析を行った。「進んで話をしようとする」というよい面が見られたが、「相手の話を共感しながら聞く」「相手の思いや考えを受け入れ理解する」「話を受けてつなげる」という意識に課題が見られ、聞き手の育成の必要性が明らかとなった。

## 3 開発研究

### (1) 単元における学習指導の流れ

学習指導において、指導者は、児童に「話し合い」の力を付けること（聞き手の育成）を目的としている。しかし、児童のねらいは、学習活動の「目的」の達成にあり、児童にとって「話し合い」は、その「目的」を達成するための手段となる場合がある。そのため、指導者が、指導者の目的と手段、児童の目的と手段を明確にすることが大切であると考えた。そこで、学習の流れと指導者の意識について以下のように整理し、単元の開発及び学習指導の工夫を考えた。



### (2) 聞き手の「感じる力」「想像する力」の育成の手だての視点

#### ア 目的意識や相手意識、課題意識を明確にもたせる（目的意識・相手意識・課題意識・方法意識）

「伝え合う力」を高めるには、「自分の思いや考えをもつ力」や「受けてつなげる力」と、その場の状況や目的、相手に応じて、自分から進んで「主体的に学習する力」を身に付けさせることが必要である。そのためには、児童の意欲喚起が欠かせない。その上で何を学習するのか（目的意識）、学習していることをだれに発信するのか（相手意識）、どのような方法で学習するのか（方法意識）、また、各時間の課題についての意識（課題意識）も明確に児童にもたせる必要がある。＜手だて：題材の選定、導入の工夫、方法の明確化＞

#### イ 相互理解を深める（話し合いの方法意識と評価意識・場の意識）

互いの思いや考えを尊重し、話をつなげたり話題に沿って思いや考えを納得したりして話

し合えるように、話し合いの人数や組み合わせ、形態を考慮する（場の意識）。また、話し合い活動で、児童が身に付ける力を明確にし、児童自らが話し合いの方法意識をもつこと、またその課題を振り返らせることが大切である（話し合いの方法意識と評価意識）。〈手だて：場の工夫、話し合いの例の活用、時間の確保、掲示の工夫、ワークシート・話し合いボードの工夫、支援の工夫〉

### ウ 聞くことを意識させる

聞く力を育成するためには、聞くことそのものに意識を向けさせ関心・意欲を高めることと、聞くことの大切さを児童に実感させる必要がある。〈手だて：朝学習（スモールステップ）〉

### (3) 学年における聞き手及び話し手の「感じる力」「想像する力」の能力表の作成

小学校学習指導要領解説国語編（平成20年8月）を基に、聞き手及び話し手の「感じる力」「想像する力」「考える力」について発達段階を追って精査した。「感じる力」「想像する力」については、さらに伸ばすべき力を補い、聞き手及び話し手の「感じる力」「想像する力」「考える力」の能力表を作成した。

### (4) 検証授業

平成21年11月に、都内公立小学校の第5学年において検証授業を行った。

<b>&lt;単元名&gt;</b> 「よりよい話し合い活動を通してストーリーテリングを成功させよう！」（題材：「木竜うるし」）	
<b>&lt;単元の目標&gt;</b> ○共通点や相違点などを見いだしたり、新たな考えを生みだしたりしようとしながら進んで話し合う。 ○相手が伝えたいことは何かを想像したり、感じたりしながら、互いの考えを関係付けたり、価値付けたりして聞く。 ○それぞれの意見を尊重して、よりよい考えを共有できるように整理しながら話し合う。	
<b>&lt;学習指導計画&gt;</b> （10時間扱い 国語7 総合的な学習の時間3「日本のよさを知ろう」）	
1 <small>（給）</small>	ストーリーテリングを体験する。
2	学習のめあてと見通しをもつ。
3	登場人物の権八と藤六の性格や行動について考える。
4	登場人物の権八と藤六の性格や行動について話し合う。
5	物語の内容について話し合う。
6	ストーリーテリングの工夫をそれぞれに書き出す。
7	グループごとに、聞き手が楽しめる工夫について話し合う。
8 <small>（給）</small>	グループごとにそれぞれの分担を決め練習する。
9	グループごとにストーリーテリングの練習をする。
10 <small>（給）</small>	1年生へストーリーテリングをプレゼントする。

**題材の選定と導入の工夫、学習活動の意欲付け**

- ・ストーリーテリングの体験という導入
- ・登場人物のおもしろさやリズムのある物語が題材
- ・一年生にストーリーテリングをプレゼント

**3回の話し合い活動の設定（4、5、7時）**

- ・段階を追っためあての設定
- ・話し合いの経験の積み重ね

**学んだことを生かす実践の場**

- ・話し合いで読み深めたことが生かされる場
- ・学習したことへの充実感や達成感

**<本時の学習指導>**（5/10時）

掲示・板書の工夫

話し合いの例の活用

3名又は4名班  
話し合いボード・セントカードの活用

ワークシートの工夫  
課題・話し合いの振り返り

**<前時>**  
課題について自分の考えを書く。

**<本時>**  
本時のめあてや学習活動を確認する。 → 話し合いの方法を確認する。 → 班で話し合う。 → 話し合ったことを発表する。 → 学習の振り返りをする。

目的意識化・自分の考えの形成 → 他者との相互交流 → 自分の考えの再構築 → 身に付いた力の意識化

**話し合いの例<一部>**

A: 藤六はこわがりだと思います。なぜなら、ふちにのこぎりを落とした時に、権八におめえも入ってくれと言っていたからです。〈理由〉  
 B: そうだね。いつも権八の言うことを聞いているし、こわがりだと思います。  
 C: Bさんは、藤六は、権八のこともこわがっているってことかな。〈確認〉  
 B: うん。  
 C: そうか。たしかにAさんの言うとおり藤六はおめえも入ってくれと言っていたね。でも、Bさんが言っている、権八の言うことを聞いているから、権八をこわがっているというのは違うと思うな。どう？〈受容・考え〉・・・聞  
 A: もう一度文章をみてみようか。〈提案〉  
 C: そうしよう。  
 A: 権八のこと、藤六は、すぐ「あいよ」って聞いているけど、ここのところ、・・・

※ 話し合いの例は、前時の話し合いの発話を基に、付けた力を明確にして作成したものである。指導者と児童の代表が役割を分担して行った。

## 4 研究の成果

### (1) 発話分析から

発話分析の結果を考察すると各時間のねらいの達成が見られ、聞き手の「感じる力」「想像する力」を育成する手だて及び本単元は、伝え合う力をはぐくむ上で有効であったことが明らかとなった（表1）。手だてについては、児童によって有効にはたらくものが違い、児童の実態に

③

表1 検証授業を通じた児童Bの変容

(検証第1時) 相手の思いや考えを分かろうと聞き、言い換えをする。

発話番号	発話者	発話内容	行為的機能	はたらき分け	同調性
20	A児	なんでぼくがおまえの木を切らなくちやいけなんだから、	4	2	1
21	A児	反発って言うか、言い返した方がいいと思いました。	4	2	1
22	B児	このあいだは、おれがしよって帰ったから、今度はおまえがしよって帰れ、って。	4	7	1
23	B児	なるほど。	4	7	1

<発話分析について>

発話分析は熊谷智子(1997)の発話分析項目を基に分析・考察を行った。発話のやりとりが連なっていくところに相互作用が展開されるとし、個々の発話機能について多角的に考察し、その発話機能の組み合わせから分析を行う方法である。  
 ・行為的機能：(1)情報の提供を求める、(2)相手の行動を促す、(4)情報内容を述べる、(5)相手のことは認識・はたらきかけ：(2)相手に情報を与える(7)共感する(8)相手の共感を誘おうとする。  
 ・同調性：(1)相手が向けてきた流れにのる。主張に賛成する。  
 例えば(4)情報内容を述べる+(7)共感する+(1)相手が向けてきた流れにのるの組み合わせを見る。前に発せられた発話に対して、相手が向けてきた流れによって、共感的な意見を言っていると分析できる。このような発話の組み合わせの連なりを分析することで、発話の相互作用を考察することができる。

<考察>

A児の「言い返した方がいい」という発話に対し、言い返す言葉を具体的に想像し、言い換えて発言している。さらに「なるほど」と続き、友達の思いや考えを共有して、理解したことが分かる。

C児の言葉をそのまま受け入れ、さらに「いっしょにやろう」という自分の思いを加えている。A児も2名の発言を受け、内容を広げている。そして、B児はこれらの付け足した発言を総じて「悪い」という言葉でまとめている。悪いという言葉は、この班の話し合いの中では、登場人物の心の変化がまだ起きていないことと同様の理解である。つまり、登場人物の心の変化の理解を深め確認をしたことにつながる。

「全員一致?」とみんなが聞き、納得する話し合いを行うためみんなが確認している。2回の話し合いでは、自分から意見をまとめる姿は見られなかったが、進んで話をまとめている姿が見られ意欲も高まってきたと言える。A児の「軽い気持ちでいいですね」という発言に対して、ここでも自分の言葉で例えを用いて付け足しをしている。これは、登場人物の心の変化の理解を深め確認をしたと言える。

(検証第2時) 相手の意図を感じたり、考えたりしながら聞き、付け足しをする。

29	C児	ここはそういわずに。	4	7	1
30	B児	そういわずにいっしょにやろうみたいな。	4	7	1
31	A児	まだお金、やろうぜみたいな。山分け。	4	7	1
32	B児	まだ、悪いんだ。	4	7	1

(検証第3時) みんなで納得する話し合いをする。

18	D児	速く強く。	4	2	1
19	A児	速く強くだよ。	4	8	1
20	B児	全員一致? 強く速くは?	1	8	1
21	A児	軽い気持ちでいいですね。	2	8	1
22	B児	はい。どうぞ	5	7	1
23	B児	まいった。もう過ぎたことは気にしないっていうかんじで軽いんじゃない。	4	8	1

合わせていくつかの手だてを行うことが必要であることが分かった。また、本単元は、内容を読み深めるための話し合い活動であったが、指導者の目的である「聞き手の能力」の向上とともに、児童の目的でもある「内容を読み深める力」も伸びており、相乗効果が見られた。このことから、国語科の学習において聞き手の能力の育成は、「話すこと・聞くこと」の単元だけでなく、指導者のねらいのもち方によって、「読むこと」などの他の単元でも育成できることが言える。その際には、指導者の目的と児童の目的を明確にして行うことが大切である。

(2) アンケート結果から

「聞き手の育成」に視点をおいた指導を行った結果、「友達の話をよく聞くことができるようになった」と感じた児童が48ポイント増(計84%)であった。さらに、「自分の思いや考えを話すことができるようになった」と感じた児童も53ポイント増(計78%)であり、聞き手を育成することは、同時に話し手の力の育成にもつながることが分かった(図1)。

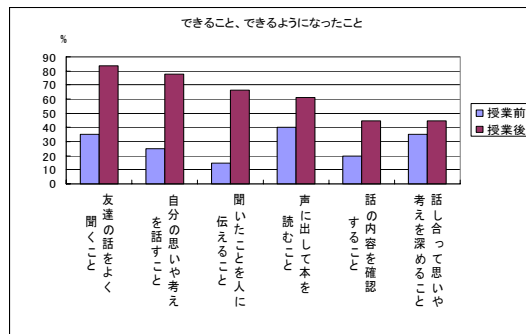


図1 話し合い活動でできること、できるようになったこと

「話し合っていて思いや考えを深めること」については、10ポイントの伸びであった。発話分析から深め合えていることが分かるのだが、児童が思いや考えを深めたと自覚できるために、さらに学習前と学習後の変化した様子を言葉などで具体的に表して、振り返らせるような手だてが必要であったと考える。また、話し合いの経験を今後も継続して行い、友達から認められたり、聞き方や話し方の方法が分かったりといった実感がもてることで、話し合いによって思いや考えが深められるという意識が高まると考えられる。

IV 今後の課題

- ・ 聞く力の構成要素をさらに整理し、伝え合う力の充実を図った指導計画を作成する。
- ・ 聞く力についての評価方法を検討し、より効果的な指導方法及び単元の開発を行う。